■□ 自然へのアプローチー今，若い研究者がとりくんでいること－6

奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター研究室の今

奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター　前田喜四雄

Qu'est-ce que ce! Laboratory of the Center for Natural Environment Education, Nara University of Education. Kishio Maeda（*Center of Natural Environment Education Attached to Faculty of Education, Nara University of Education*）

まず，わかりにくい本センターとは何かから紹介する。近年になり，児童や生徒の理科離れ，自然離れが問題になっている。その原因はそれらの教育を担う義務教育の教員が理科や自然から遠ざかっているのだから，当然だ，そこで，まずそのあたりを何とかしなければならないだろう，ということで教育学部にこのようなセンターが発足したのである。しかし，それにしてはおそまつなセンターであり，専任教員（国立大学法人になる前に発足したので，当時は専任教官だった）は2名である。それでも国立大学法人になる前には省令施設ということで，定員が2名と決められていた。しかし，法人になった現在では定員は決まっておらず，いつ1名になるか，はたまた専任が無しになるか，定められていない。それでもこのセンターが掌握する施設は奈良市五條市大塔赤谷にある奥吉野実習林（176ha，標高は400mから1200m，二次林・人工林・原生的な林からなる）と大学の南500mにある奈良実習園（田畑を中心にした1.1ha）の2つであり，通常はここを主たる教育の場として，本学の学生は当然のこととして，外部に開かれた組織として，現場の教師や児童・生徒，一般の方々を対象として様々な教育活動を行っている。なお，奥吉野実習林には宿泊施設があり，センターの主旨にかなう場合には一般の人にも利用可能である。

というセンターではあるが，この研究室では卒業研究の学生や院生（修士課程）を受けいれている。当然，教育学部の附属である，自然環境教育センターの研究室であるというしばりはある。すなわち，決して理学部などの生物学研究室ではなく，常に教育を念頭におく，しかも自然環境教育の範疇で研究を行わねばならないということである。しかし，専任教員の研究テーマは1名が比較的大型動物を対象にした野生動物学管理学，他が小型動物，特にコウモリ類を対象とした分類学・保全生物学であるので，このテーマを希望で集まってくる学生もいる。いずれにしても，仕事や研究は2名ともフィールドワークを中心としている。

なお，本研究室に所属できる学生は，教員養成

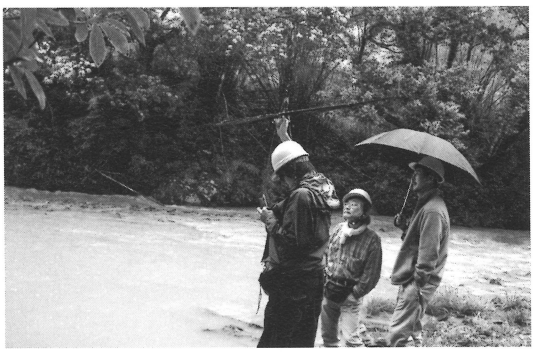


図1． コウモリの調査風景．

課程理科と同生活科専修の学生，および教員養成課程でない環境教育コース自然誌専修の学生である。現在本研究室に所属している，あるいはゼミナールに集まって来ている学生の様子を紹介する。まず，生活科専修の学生が１名おり，彼は野外活動を課題としている。教員養成課程の学生は，「徳之島におけるリュウキュウテングコウモリの採餌行動」，「イエコウモリの日周期活動」という課題，自然誌専修の学生は，「昆虫類の発生個体数とイエコウモリの飛翔との関係」，および「大台ヶ原におけるニホンザルの食性」という課題に取り組んでいる。なお，他に，ヌートリアを卒業研究の課題にしたい，奈良公園におけるシカの行動を課題にしたい，大学周辺のトンボを課題にしたい，奈良公園でシカを研究したいが具体的な課題は未決定などの希望をもっている学生がいる。

また，上記になかったような課題として，淡水魚やネズミ，イノシシ，教育面からみたカエルやオタマジャクシ，ドングリ，鳴く虫，ヒッツキムシ，鳥，クモ，チョウ，アリ，水生昆虫，コウモリについての認識，自然観察会の意義，虫に関する嫌悪感の実態を取り上げた学生もいた。また奥吉野実習林における哺乳動物相やカミキリムシ相，鳴く虫相，大木の分布，シカによる剥皮，環境別土壌動物相，またシカの食性，奈良公園におけるシカの齢，ウの食性，紀伊半島におけるユビナガコウモリの移動，奈良公園における地上歩行性昆虫など取り上げられた課題や対象動物も様々である。いずれにしても，本研究室は学生が教員の力をかりない（教員の掌握範囲を超えても）でも「これをやりたい」と思えば，自然環境という範囲内で許されるところであるが。